

平成18年度 第2回市民活動サポートセンター運営委員会 会議録

平成18年7月20日（木）18:30～20:00

横須賀市立市民活動サポートセンター

出席委員 9名……柴崎、多田、小野、佐藤、鷹野、増田、増渕、松井、有森
事務局 5名……YMC Aよこすかコミュニティサポート 安田、渡辺、高村
市民生活課 小座野、堀井

1 報告事項

次第に沿って報告を行った。

2 審議事項

- (1) 市民公益活動団体、(2) 指定管理者の業務評価について、提案どおり承認した。
サポートセンター登録団体の活動内容の記載について、「公益性」の観点から見直しを図る。

[意見概要]

◆ プチ展示コーナー、貸出し備品について

(事務局・指定管理者)

前回の運営委員会で提案された「プチ展示コーナー」は、「活動紹介コーナー」として入口通路側に設置し、7月からスタートした。最初に小野委員所属のガールスカウトの活動紹介を行った。今後もコーナーの周知を図っていく。

貸出し備品の写真はパウチして受付に張ってあるが、最終的な張り出し場所は現在検討中である。

◆ 夏の市民活動体験スタンプラリーについて

(事務局・指定管理者)

今年は34団体、51イベント。広報の新しい試みとして横三地区県立高校校長会を通して高校生へ周知を図ったり、県立保健福祉大学でのPR（相談会）を行ったりしている。また、市民協働推進セミナー受講者にもスタンプラリーに参加してもらい、団塊世代の方に実際に市民活動やボランティア体験をしていただき、地域デビューにつながるように計画している。

(柴崎委員)

各委員の所属団体では、どのような状況か。

(増渕委員)

神奈川新聞に掲載されて希望者が殺到した。新聞に載った写真が良かったのと、材料費を非常に安く設定しているためかと思われる。(洒落弁会)

(小野委員)

宣伝不足で、人数がなかなか集まらない。周知にもう少し力をいれていきたい。(ガールスカウト)

◆ 市民公益活動団体について

(事務局・市民生活課)

運営委員会で毎回、市民公益活動団体について審議していただいているが、今一度その意味を確認したい。サポートセンターに団体登録をする際、公益性があるか否かを申請してもらっている。公益性の判定は申請時に指定管理者が行い、運営委員会で承認をうけることになっている。公益性が認められれば、印刷機やパソコンの予約など、サポートセンター施設を優先して使えるようになる。現在の方法では、団体の申出のみで公益性を認定しており、団体の中には予約申請を目的に公益性を主張するところもある。当初は団体数も少なかったのですが、各団体の活動について運営委員会で情報交換をすることも可能だったが、センターの利用者及び利用団体の増加に伴い、難しくなっている。市民協働推進条例では公益性を「不特定多数の者の利益その他の社会の利益」と定義している

ので、その視点からも見ていただきたい。

例えば、今回の資料4を見ると、「バレーボール連盟」の名前は連盟になっているが、活動内容を見ると個別のバレーボールチームのように思われる。また、「鉄道模型同好会」も活動内容の記載を見る限りでは公益性があるとは判断できないように見える。「ボーイスカウト」は活動内容が分からない。

(事務局・指定管理者)

個別のサークル活動は公益ではないということで判断しているが、「バレーボール連盟」は各団体の連絡調整など「連盟」としての活動を行っており、公益性があると判断した。また「鉄道模型同好会」も、同好会的な活動で始まったが現在は自分たちで楽しむだけでなく子供たちに鉄道の良さをアピールする活動を続けているということなので公益性を認めた。ただ、このままの書き方では誤解を招きかねないので、活動内容の表記を事務局側でチェックし、誤解のないような文章に変えていきたい。市民の視点から分かりやすいように、来年度に向けてDBの内容を整理していく。団体が提出してきた文のままHPなどに載せてしまうと言葉が足らなくて、誤解を生じてしまう可能性があるので、事務局として補う必要があれば、公益性が分かるように補足すると団体に了解を取った上で表記方法を訂正していく。

(柴崎委員)

各団体でそれぞれに公益活動をしていると思うが、誤解のないようにしていった方がよい。

(佐藤委員)

HPなどを見た人が理解できるような文章にしてほしい。

(鷹野委員)

公益性を判断するうえで、基本的に団体を排除する方向にならないようにしていきたい。文章自体は分かりやすくすべきだが、市民活動は横須賀のために活動しているという観点でもって、閉鎖的になるのではなく、なるべく広く門戸を開くようにしたい。市が作った施設なので、個人も含めてなるべく広く、という形でお願いしたい。

(柴崎委員)

今までの議論の中でも排除していこうという意見はあまりなかったから心配要らないのではないかな。

(事務局・市民生活課)

センター設立の際に、趣味の団体を市民活動として支援していくかどうか、という議論があった。議論の中で最初からハードルを高くするのではなく、趣味の活動でも自分たちができることを考えてステップを踏みながら公益活動に目を向けてもらいたいという発想で、趣味の活動も支援していこうということになった。排除するのではなく、間口を広くするという基本姿勢は変わらないと思う。

◆指定管理者の業務評価について

(事務局・市民生活課)

平成17年度(平成17年4月から平成18年3月)の指定管理者の業務評価を行った。市民生活課で評価を行い、既にYMCAよこすかコミュニティサポートにも見ていただいている。サポートセンターの運営は、指定管理者と市民生活課だけではなく、運営委員会の意見を聞いたうえで決定するという基本コンセプトがあるので、業務評価についても運営委員会の皆さんのご意見を伺い、検討したうえで決定したい。市民生活課が出した評価内容について、ご意見、ご質問、ご提案などあったら発言してほしい。

昨年度との評価と違いが出た点は、3箇所。「1全般(2)市及び運営委員会との連絡調整を密に行っているか」が標準から劣になった。事務局長及び主要スタッフ2名が同時に変わることにについて事前の連絡及び相談がなかったことが理由である。次に「3施設の目的や理念にあった事業の実施(6)起業への働きかけも考慮しているか。特に起業の社会的活動を促進しているか」については、青空市民祭への参加や、団塊世代の地域参画支援などで地元企業等との連携や働きかけを行っているため、劣から標準とした。最後に「4管理(2)防犯対策、防災対策などの危機管理体制が整っているか」については優から標準とした。その結果、合計206点で総合評価は「優」と評価した。

(柴崎委員)

審議に入る前に、こういった手順を踏んで決定されるのか確認したい。

(事務局・市民生活課)

評点だけではなく、コメントについてもご意見をいただきたい。あくまでもこれは市が仮に評価したものである。既に指定管理者には確認してもらっているが、運営委員会の了承を得てから市としての決裁にあげるなので、現段階では最終評価ではない。

(佐藤委員)

1(2)と5(1)の違いは何か。人員管理を適切に行っているということと、直接は結びつかないのか。

(事務局・市民生活課)

今回は17年度の評価である。17年度の管理体制は高村事務局長が適切に行っており管理体制上は全く問題がなかったと評価している。4月以降の人員体制については、18年度業務評価として来年評価する。連絡体制については、もう少し早い段階で情報提供をしてほしかったということで、厳しいかもしれないが今回はこのような評価をした。

(柴崎委員)

市民生活課の評価で特に問題はないと思う。「優」といってもぎりぎりの「優」だが・・・。

(事務局・市民生活課)

標準に収まっていれば問題がないと判断している。標準をはるかに上回っているので期待以上の成果が出ており、全く問題はないと思う。

(佐藤委員)

「利用者増が図れたか」という項目で、利用者数が当初より2.5倍でも標準なのは何故か。

(事務局・市民生活課)

何をもって優とするかが問題。実は、利用者数は前年度より若干少なくなっている(実際は平成16年度よりほぼ横ばい)。しかし、前年度比からみて劣っているかというそうではないと思う。数値ではほぼ変わらないが、市としては目標をクリアしているという評価をした。

(柴崎委員)

「飽和状態」というより、「十分に活用されている」という表現の方が良いのではないか。

◆のたろんプロジェクトについて

(事務局・指定管理者)

各プロジェクトの進ちょく状況を事務局からまとめて報告したい。運営委員の方には各プロジェクトに参加していただいているので、補足事項などがあれば発言してほしい。

※ 各プロジェクトの進ちょく状況については別紙のとおり

(小野委員)

プロジェクト2では、サポートセンターのPRを目的とした「のたろんサンバ」を8月5日にお披露目する。作詞作曲はもちろん、CDの録音、歌唱、踊りまですべてボランティアの力で作り上げている。なお、のたろんサンバの歌詞のフレーズはプロジェクトメンバーが考えた。メンバーの想いが詰まっている。

(増田委員)

プロジェクト4では、副題『市民公益活動がわかる』のとおり、サポートセンターを知らない人にも「のたろんフェア」が分かるように工夫していく。のたろんフェアの目的は、団体のPRや資金集めなどだが、それぞれを分かりやすく明確に分けていく予定である。また、キッズコーナーにステージを設け、ミニ活動体験やビデオ放映を行う。さらに、サポートセンターのコーナー

を中央に設け、のたろんフェアやサポートセンターのPRを行う。100周年記念ということで、今までフリーマーケットや活動紹介ができずに参加できなかった小さい団体も積極的に参加してもらい、参加100団体を目指す。また、参加団体はお客さんではなく、できる範囲で準備や運営に参加してもらおう。去年は、グループ内で話し合いができてよかったという意見があったので、今年はそういったことを徹底してやりたい。去年の「村」の代わりに「ストリート」をつくり、出店団体同士の交流も積極的に図るようにする。交流会は1日目終了後にサポートセンターで行いたい。

(小野委員)

サポートセンターのHP上にのたろんプロジェクトのページ、またはブログを作りたい。各プロジェクトの進捗よく状況を日々更新し、広報宣伝を兼ねてのたろんプロジェクトでこういうことをしているということを広く一般の人に知ってもらおうとともに、プロジェクトメンバー間の情報把握の場とする。

(事務局・市民生活課)

市民活動に関心のない一般の人たちにどのように会場内を廻ってもらうかが課題。残念なことに無関心な人たちにサポートセンターに入ってもらい、個々の市民活動のブースを見てもらうのは非常に難しい。バザーのブースを散在させることで、バザーに関心のある一般の人も会場内を巡回しやすいようになっている。会場全体にバザーのブースを配置しても、柱の陰で人がまわってこないなど場所によってメリット・デメリットがでてくる。人を呼び込むためのバザーを一纏まりにしてしまうことによって、人がうまく流れなくなる可能性があるため、その点をよく考えてほしい。

(鷹野委員)

プロジェクトメンバーは色々なアイデアを出しながら企画作成しているが、各プロジェクトで、ある程度企画がまとまったら、市民生活課の人にも入ってもらった方がよいのではないかと。昨年まではフェアの企画はサポートセンターのスタッフが中心に行っていたが、今年はボランティアであるプロジェクトメンバー中心に行い、スタッフは事務局に徹してもらおうようにしている。サポートセンターのスタッフや市の職員は施設の機能やこれまでの経緯などを理解しているから、これはできてこれは出来ないと判断できるが、プロジェクトメンバーは分からないところも多い。また、プロジェクト全体の動きを把握しているのは事務局なので、全体を繋いだり、要所要所で意見をもらったりしたい。

(事務局・市民生活課)

今までのように団体紹介とバザーが雑然としているやり方に問題点があることは認識しているが、何故あのような形になったかという点、多くの無関心な人に個々のブースに一人でも多く来てもらうために試行錯誤してきた結果である。原点に戻ることによって無関心層が来なくなってしまうリスクも考えられる。そこをどう補うかということを考えてほしい。

(柴崎委員)

次回の運営委員会では、のたろんフェアの具体的な企画ができているだろう。市を含めて「のたろんフェア」の議論ができるのではないかと。

(事務局・市民生活課)

ある程度案ができた段階で、説明をいただくと有り難い。

(増田委員)

9月1日ののたろんフェア実行委員会には案を提出するので、それまでには声をかける。

(柴崎委員)

いろいろな制約があるので、市には相談していった方がよい。

以上